

# 適切な管理頭数に基づき 牛と相談しながら進める 堅実な酪農経営

通常、繋ぎ牛舎から放し飼い牛舎へと規模を拡大する場合は、乳生産の増加を期待した飼養管理を行うのが一般的な方法である。今回は、乳生産の増加を求めた結果の反省を踏まえ、牛の健康への配慮と、労働・作業性を念頭に置いた適正な管理頭数で、堅実な酪農経営を維持している生産者を紹介する。

## 安定的な乳量・乳質を維持

現在の飼養規模は経産牛77頭で（うち、搾乳頭数69頭）、フリーバーン牛舎で管理している。後継育成牛は、自家育成と外部導入。飼料は自家TMR給与で、濃厚飼料、単味飼料、自家産のイタリアン（チモシー）サイレージ、稲ホールクロップサイレージ、アルファルファ、オーツを使用し、朝夕の1日2回給与である。乾乳は、飼料代替ストレス低減のため、低エネルギーの1群管理メニュー

1で40日乾乳を採用。搾乳回数は1日2回。直近1年間の搾乳牛1頭当たりの平均乳量は30・4kg、体細胞数14・8万、分娩間隔は404日と平成22年全農畜産事業委員会提示した高位生産者の技術指標とほぼ同レベルの成績である。

## カウコンフォート重視の飼養管理

拡大前は濃厚飼料多給による高乳生産を求め、42頭の繋ぎ牛舎で平均35〜36kg/頭・日の乳量を達成していた。しかし、高生産のため牛へ

負荷がかかり、次第に事故・淘汰牛が増加し、更新費・労働力の増大につながっていったという。その反省から、規模拡大後（約4年前）は、なるべく牛に負担をかけず、1年でも長生きするような飼養管理へと、方針を転換した。

まず、高泌乳メニューから粗飼料割合を増やし、極力添加剤に頼らず、牛に負担をかけないメニュー内容に調整。また、現行牛舎は104頭ほどの飼養が可能だが、飼養密度を考えた最大で77頭とするなど、1頭当たりの飼養面積を十分確保し、牛のストレス低減に努めている。

そのほか、牛舎の屋根を高く、十分な数の換気扇を設置し、屋根裏に断熱材を使用するなど暑熱対策に配慮した構造である。水槽の設置数も

十分で、体の小さい初産牛が飲めるような高さにするなど、常に牛側に立った視点で管理を行っている。

## 牛と相談しながらの管理を徹底

牛へのストレスを軽減し、健康重視の管理に変更した結果、最近では周産期の疾病がほとんど発生しておらず事故も少ないことから、現在の乳量でも収益は悪くないという。

農場主は、「良質な粗飼料の多給、牛をストレスなく管理し健康を保つことが、結果として人の負担を少なくする。今後も現状規模を維持し、牛を1年でも長生きさせるような飼養管理を心がけたい。さらに収益性を向上させるためにも、和牛のETの活用も検討したい」と、堅実な酪農経営のヒントを語ってくれた。

### DATA 事業規模

所在地：九州地方  
飼養頭数：77頭（経産牛）  
従業員数：4人

## 飼養管理の工夫・徹底



初産牛が飲める高さに調整し、清潔で十分な水量を確保した水槽



屋根の高い牛舎



飼槽壁の角で牛が脚・胸垂を傷つけないように角部分を斜めにカット



十分な数の換気扇の設置



屋根裏に断熱材の設置

### 直近1年間の生産成績

|              | 直近1年の生産成績 | 技術指標 <sup>※1</sup> |
|--------------|-----------|--------------------|
| 乳量 (kg/日・頭)  | 30.4      | 30                 |
| 乳脂肪 (%)      | 4.15      | —                  |
| 乳タンパク質 (%)   | 3.36      | —                  |
| 体細胞数 (千個)    | 148       | 200 以下             |
| 分娩間隔 (日)     | 404       | 380 <sup>※2</sup>  |
| 初産牛の除籍頭数 (頭) | 0         | —                  |

※1 平成22年全農畜産事業委員会提示

※2 家畜改良事業団の目標は395日以内



牛床面積も9.2㎡/頭と広く確保し、牛もストレスなく寝ている

### Point!

牛のストレスを低減させる管理のポイント

- ①粗飼料割合を増やし、添加剤に頼らないメニュー
- ②1頭当たりの飼養面積を確保 (9.2㎡/頭)
- ③暑熱対策 (換気・断熱等) の実施
- ④初産牛に配慮したきめ細やかな対応